



行
門へ4
號5445
卷2



所圖會貳篇

撰

梅屋鶴子大人

者 捏園梅明大人

ヤモシキ

居

樹

花

樹

唐

樹

葉

樹

之

樹

行

樹

實

樹

十

樹

加

樹

木

樹

山

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

樹

行

樹

實

樹

之

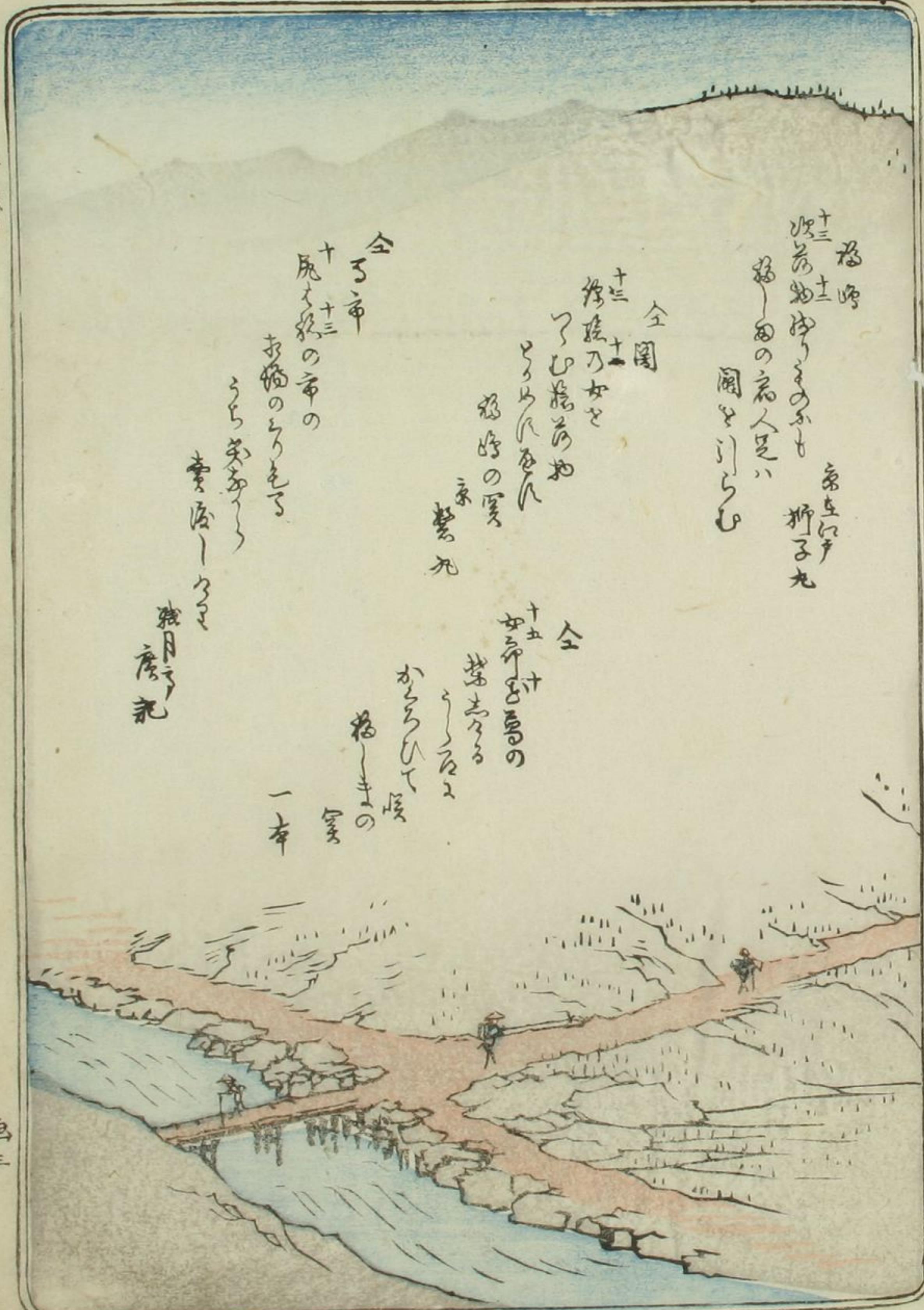
樹

行

樹

實













岐
蘇
中

いのまみ
いづみのあらうすん
おととよのじゆく
おのいまみくみ
あくみん

櫻
沢
仙
ね
山
千
洞
亭

全
人
生
道
古
木
通

大
坂
豆
衣





木曾山

木秀山

五
卷三

卷之三

本居宣長

二余亭

卷之三

十三
枝
ひやうとう
おまめのねと
ウスホウの
十三
枝
ひやうとう
東風の香

一九
西漢書

103

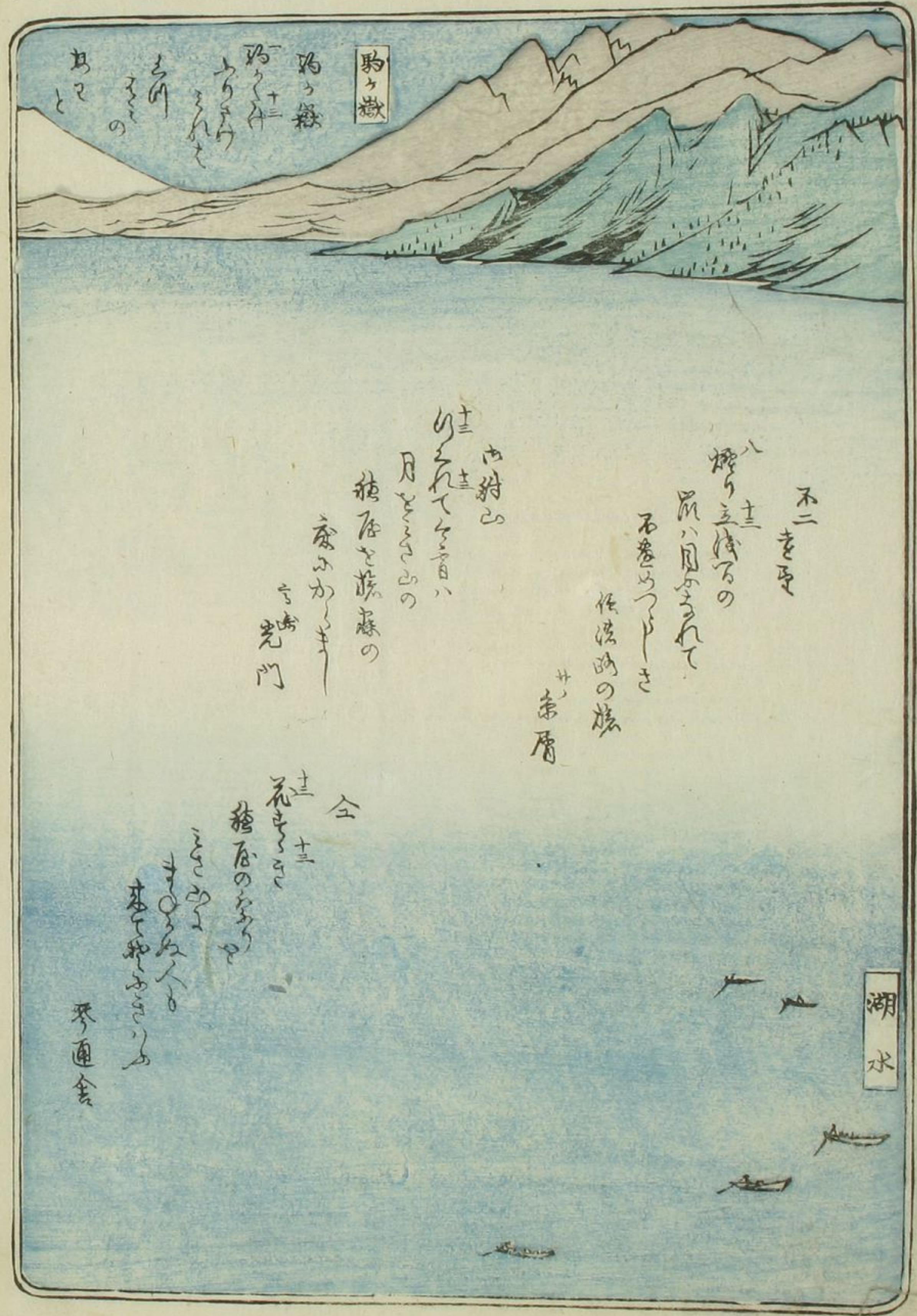
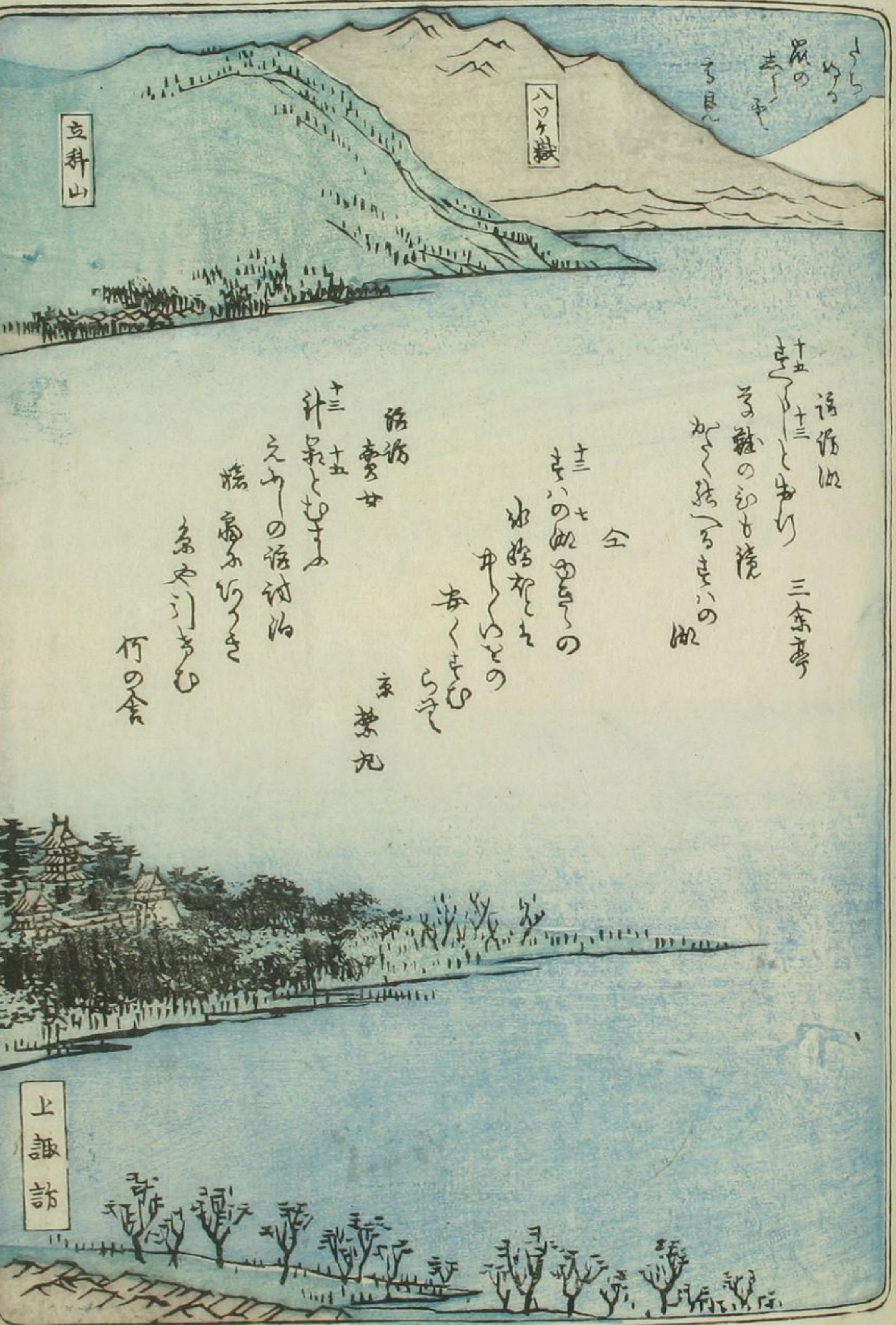
卷之三

卷之二

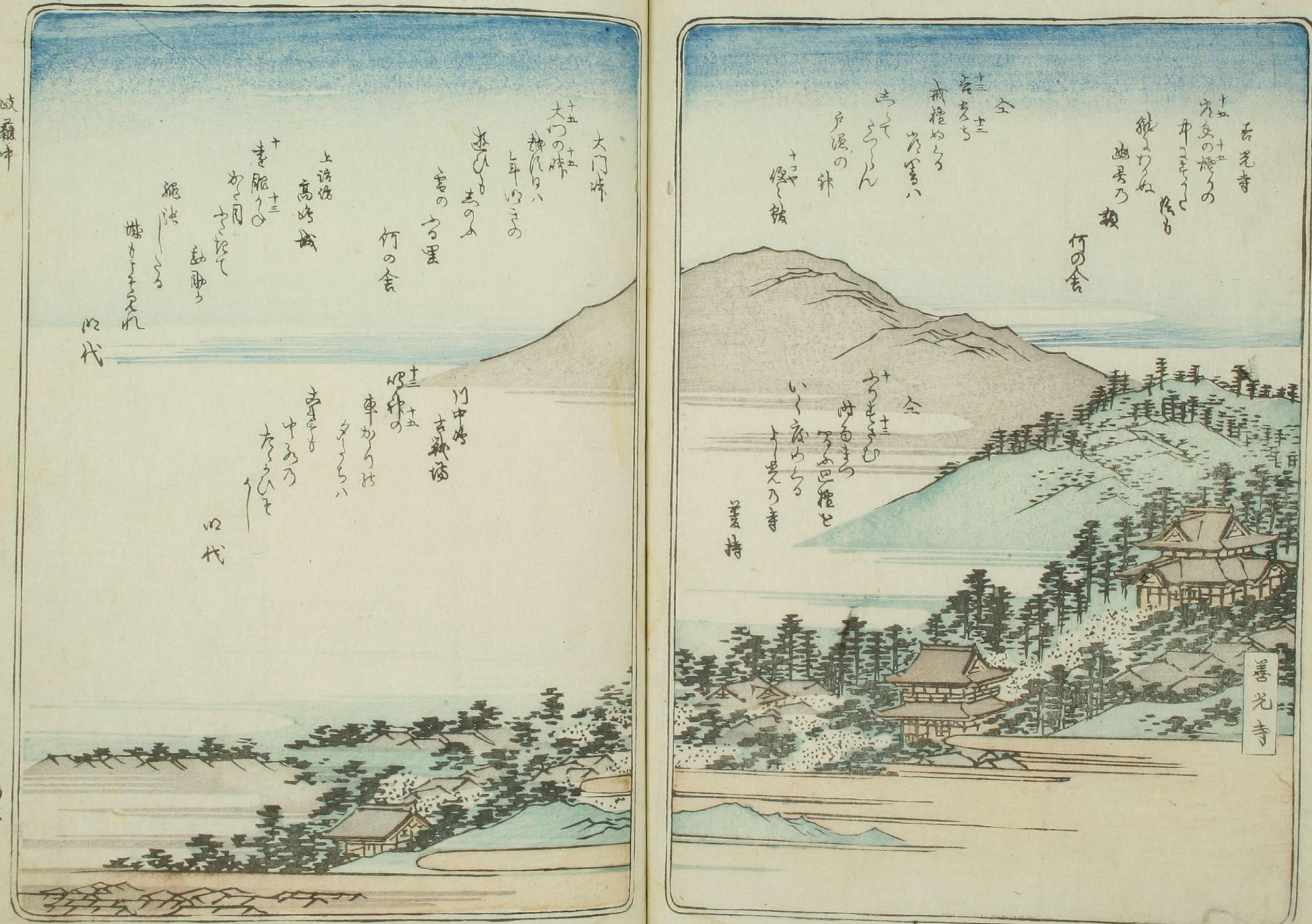
八
卷之三

十三
旅の里あるか
とよひすみたれ
おおふきゆく
おうゆうれ
十三
松入松
風あそき
風あそき
松入松
おやせん

岐
蘇
中







岐龜中

卷土



人 丘
羽衣
正深亭
後山
宋端甫
近
辛山浦
哥雪
淡子松
波好

せよ、人をもてのゆかずともうとすむひん おおきに ね
、金くらむ一あらわすかつまのあはれにて う見
ほせど、鳥ひとりあひらぐをいかがく事本 ひんじ 吉え 鶴亭
はもくのわくへもみじん吉田のまうぢを終とて ひき 猿成
そりゑよひく、あめの岡引そちり引ての藤の轟事本 菊の門
馬鹿、娘のゐのさのまかて、狂三の狂歌、うらやまといひ人足 休也 系脣
か、魔といふうそのまかて、いやあまふのみ旅人 おは 花守
こまよ志あるまくらう藤、くわくわ風てうる雲のあら 男大つや 楠保
木曾 おはくとあらげぬと封ゆけ、御手のまよづくまうり 布九
鷺室 おはくとあらげぬと封ゆけ、御手のまよづくまうり 京立写
素波麻 うけまくはよ春色の音うとうとあはれ、櫻の小雪庵の声 日光 章固
羅岩 亂つて、おとれとおじめのゆき、觀音さんのもとへ本音の聲 信樹

十三
トモシテアリタハ、ハシマリテシテ、シテの事も、さかへん
ハ
乳やわらきをとつて、乳が、おもろきみぐ
士
御墨のあくちと、おとこ筋への力吸角。行の肩切
士
トモシテアリタハ、其筋は、おもろきみぐを、アラム表さ
古城
サヌ庵
士
薩摩庵と、うつまく、おもろきみぐと、毛庵の力と、モ
士
空

櫻の花がさくや草の匂ひをもつて女房の匂ひで 有 植
さきうらへゆきとまん度うみゆありけりよよもむかひ 素
ハタハタモヤ時トニ女房の匂ひで本麻ヒダと岩の水付 金 松 丸
二筋ツスジアラヘテ全モ女房の匂ひで全モ女房の匂ひで トモハ食
ハタハタの事ハタハタのちに女房の匂ひで全モ女房の匂ひで 全 植 金 良
まよひがくま女房のやとふは屋代の女房の匂ひで全モ女房の匂ひで 佐 佐 田
ハナ風ハナフウへあふ情の爲事ハシメ一叶づすの葉の匂ひめ 素 植 金 良
書 筲
ハナ風ハナフウへあふ情の爲事ハシメ一叶づすの葉の匂ひめ 素 植 金 良

卷之三

須 無

まうらむ本多の近京の者旅宿となくす矣のまうる 後方山
春風ものかくは候がるをもやのうをもる 麻生
ハシタ うき船を候まつりふ名わの先達と計や交遊を乃要
ハシタ
かどりやきみづの候船や船のすら乃樹よりて 二本松
寒ふきよきよきよくへる事のあはれけり トモホシ
ハシタ 落去度ナリ候るの行あらまきりと申す
ハシタ
までのまこと全まきとひらうと人やアラム
立町
夜もとお豆体ませゝ立町のひのよあどすをもゆり 吉野中
おのづかる半度ニシテのゆきと申すがゆの能門 佐木
日中の跡をもむじのをみておひだり 佐木
ハシタ
おれへておき、トナリのてぬじつての近の能門 モリキ
おま切れをもてねじる矣のそもむつがゆの能門 二葉
おれとおれかちせまつてねじるのいやあきかやう能門
平尾
出れとおれかちせまつてねじるのいやあきかやう能門
青井

立町

橋端のかやの脚取とあゆと水車あらひまうる あまな柳
井天森
西毫者のもれいに井天のゆゑとへつかりたり 度丸
名わせられ
西毫者もれい井のゆゑの娘やね琴をもむと申す
三八九
折か松木トナリにはそあくゆと井天の森の梢ふ 十コヤ 友雅
麻竟木
茅まくら麻竟の木と浦一ナリと申すの娘やくと
おねだりや耳やまととおもてねの木と申す
おねだり
浦崎まくら麻竟の木と申すの木と申す
おねだり
全茅木
せりあくら木と海あとのそと申すと申す
お今子
茎葉の茎をひき、浦崎の木と申す
お木
茎葉の木と申す浦崎も一木と申す
お木
秀美切の木と申す浦崎も一木と申す
秀美切

矢根石

卷之三

H

活躍山

枝頭添
翁勺群

泉のあまよし
あらかわせ月の氣をさん
友
あらかわせ月の氣をさん
たこ村
泉士
あらかわせ月の氣をさん
下毛古山
碑
あらかわせ月の氣をさん
ナコヤ
酒
あらかわせ月の氣をさん
水
あらかわせ月の氣をさん
きさき
鞠
あらかわせ月の氣をさん
亭
鶴の門
あらかわせ月の氣をさん
さサキ
亮門
あらかわせ月の氣をさん
きぬ田
姿
あらかわせ月の氣をさん
日光
章
あらかわせ月の氣をさん
麻生
古
あらかわせ月の氣をさん
古
金毛小波
宗虎
金喜
文照

校

木曾川

2

م

「賣ひ難き墨はひて唐玉滴きにのべて將のま」
佐原田
松友子

「家とあきよち朝鶴の筆舟立極さへて高麗かゆの霜」
家主
九

「善内の毛馬也がくさう氣也がくさう」
佐原田
新、九

「福勝乃實す人の筆舟立極さへて禁山林れ」
佐原田
信、九

「毛馬ちゆうわ月の朱あら熟今もかゆく本方の什物」
家
人

「常ゆきをむへときひて帝の心もあらう月のけ」
廣記

通鑑

卷之三

十一

凡そ此の序の事とハシテ御用事の事と、
皮剥ておもてを取る事と、皮剥けの事は也。 本
いわば素盞がつゝ詰皮事もこれなり。 画
序の毛と皮の毛の毛の毛と皮の皮も、 画
枝つゝすうらの毛とあひて世とむ危くやります。 画
ハシテうる鶴継もあり、 画と見て経事の経のうる鶴人 画
あひ、かくゆれキビのけきのよひ百足とかる。 画
一席乃幸のまゝあきゆめぢぢりや林をわきまえとよみ考 画
さくいひたぬこの度とアセラのハ事事よむわけてそうる 画
來、まきれ林、わ葉事と一あゆみのほ、おれを有す 画
捕本訛 画

おらがめうておはすの胸もてひきとまうれ
土ハ御まごる寝をまかひておおちをまかへておねむれ

ひとり底の底ある自然の方の幸運と先づうきをもつて
さうも病氣のみでは死ぬものも少く居る者さん トセキ
押龜橋 引ゆ さておあらみの旅へひとと押あがめを取る
衣更衣網 バリリとゆまきひでをさうするやうふくは詰められ 仙台 千葉國
轟 震度 方々をさうのゆづらはほうやのまえをねの衣 尾太
馬門 まどかのまどかにあけたままなれのぬすまく トモ 横濱 姫
房宿 沢 まくらもゆるあまくさくら秀虎のけ、 仙
琴坂 菊のまくらをせんざくわらふか おもて 金
燒村山 まくらのまくらとがつてからむを焼村の山 尾大
船木屋 せのまくらをせんざくわらふか おもて 金
鶴掛嶺 たきせのねぬれをとれをせんざくわらふか 本
山人のまくらをせんざくわらふか 猿掛嶺の山 丹
山のまくらをせんざくわらふか 猿掛嶺の山 丹
刻用

卷之三

下
四

善光寺

善光寺 向のよみがれの山を涉れば御前がおもひにゆる ナコヤ吉雄
今よりはあやめの花をまわるのむちに達さん 佐喜
若狭の今もなきとおもておはなむおちん家 佐喜
若狭の先づ年うつてゆく月と一并ふうのけ 佐喜
か拂の月うきだよとあましの園をアシテ御宿 佐喜
向のよみがれの山をまへぬるをもてまかうとまのま 佐喜
ほせ朝の年芳あと若狭を御教げ水のゆうたて方 佐喜
まうて自ては老が若えりせば一のきれ女一むき 佐喜
若より雪あてて今じよくくるもむけのわざ 佐喜
若狭をもととてぬせふとあらわしあきせんのあ 佐喜
ほのせばは向をすてて見るのむらひきのひを一羽 佐喜
金鷹を 佐喜
全未充本 佐喜
全未充本 佐喜

卷之三

車のまゝに牛のけりは風味
かくてそのからみあつたるは風味
もひらひのけりは風味せいかくものとすちりの山
不二の
風味

芝見村

下編

企社

月光を覺悟せんまの水を木林にやろすと
往後のみゆく者のかへりて木林のまゝ
心も月が空つと焼一木にかうてまづまれば
風經社
山經社
根入社
西行場

ハ
往後のみゆく者のかへりて木林のまゝ
心も月が空つと焼一木にかうてまづまれば
かくふまきのやうて木林のまゝ
ちよ、からむりゆうじんの社のまゝで
風經社
山經社
根入社
西行場

全御

ハ
往後のみゆく者のかへりて木林のまゝ
心も月が空つと焼一木にかうてまづまれば
かくふまきのやうて木林のまゝ
ちよ、からむりゆうじんの社のまゝで
風經社
山經社
根入社
西行場

ハ
往後のみゆく者のかへりて木林のまゝ
心も月が空つと焼一木にかうてまづまれば
かくふまきのやうて木林のまゝ
ちよ、からむりゆうじんの社のまゝで
風經社
山經社
根入社
西行場

ハ
まのゆのそのがる夜、走まひのからせん
往後のみゆく者のかへりて木林のまゝ
心も月が空つと焼一木にかうてまづまれば
かくふまきのやうて木林のまゝ
ちよ、からむりゆうじんの社のまゝで
風經社
山經社
根入社
西行場

ハ
まのゆのそのがる夜、走まひのからせん
往後のみゆく者のかへりて木林のまゝ
心も月が空つと焼一木にかうてまづまれば
かくふまきのやうて木林のまゝ
ちよ、からむりゆうじんの社のまゝで
風經社
山經社
根入社
西行場

ハ
まのゆのそのがる夜、走まひのからせん
往後のみゆく者のかへりて木林のまゝ
心も月が空つと焼一木にかうてまづまれば
かくふまきのやうて木林のまゝ
ちよ、からむりゆうじんの社のまゝで
風經社
山經社
根入社
西行場

總志

冠
少
歲

有明山

一
卷
古

月よりの力てまふと育ての風あまむてまきを大村素士
佐保城のゆゑに鳥取をもん候をひまを度て月け大村
「暮」てと育、また近まん候をよの月ひかせち佐保
「暮」の冠うみをやふかや佐保のまほの氣佐保
當もよきあれおれぞと初うと窮う蘇のよあくられ佐保
候のふらきてあくらう弱うみのよすくらん佐保
月ひまくわのむのむきてゆひと弱うみをて育佐保
月ひ育めゆく弱うみて向うのむと育ての弱佐保
弱きがちりとおきて月ひと弱うのむ育め乃山佐保
久の月ひゆくとくとくのむと弱うのむと弱佐保
かくみ月ひと弱うのむのむと弱うのむと弱佐保
ハ主機事より候月ひ育てのむと弱佐保のむと弱佐保
たまのや井の鳴のえぬまで一きのびと弱佐保のむと弱佐保

汝序

大伴社

あはげハ歌ひのよう一をひくはまもたるむづる雲人 千字
、暮ふひとのゆきとて、これハまぶちのあは源也 佐井昌
吟まどもよみのゆきとて、先をきめされと於さん 次
そえ度々名あるとす度の姓也、けふむきとて背の筋
ちと因ともりしゆすとて、れももうる姓也の山 舟曳
老いがる日と年とゆきとて、皆もそりて姓也の山 日 先
かくかくあさの文と年と月と山と姓也の山 大 丘
燒きくつめやくまくすとて、あの月とは世不ア齊らん 武井也
我、せよおれもとせとて、姓也の月ハちうれん トサ山村
乃とくれ度のゆきとて、治のゆきとて、くわくわくくわ
立書もと書きせん丈はのまやくもくちわと無詫 京主也
大体のゆきとて、まおの様うけあれをもひて、歌ひきぢ
年ゆて、まおのねともゆと立ちて、アラ森のま ウチ子

やうゆうとましのりそくの筆意とよひを重ねむがん

正義

編樹園

嘉慶四年庚寅初夏刻成

春友亭藏板

岐蘇名所圖會二編終

